1番 決あきの

秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ

天智天皇

1番

わが衣手は 露にぬれつつ

天智天皇

2番 決はるす

春すぎて 夏来にけらし 白妙の

持統天皇

2番

衣ほすてふ 天の香具山

持統天皇

3番 決あし

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の

柿本人麻呂

3番

ながながし夜を ひとりかも寝む

柿本人麻呂

4番 決たご

田子の浦に うち出でて見れば
白妙の

山部赤人

4番

富士の高嶺に 雪は降りつつ

山部赤人

5番 決おく

奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の

猿丸大夫

5番

声きく時ぞ 秋は悲しき

猿丸大夫

6番 決かさ

かささぎの 渡せる橋に おく霜の

中納言家持

6番

白きを見れば 夜ぞふけにける

中納言家持

7番 決あまの

天の原 ふりさけ見れば 春日なる

安倍仲麿

7番

三笠の山に 出でし月かも

安倍仲麿

8番 決わがい

わが庵は 都のたつみ しかぞすむ

喜撰法師

8番

世をうぢ山と 人はいふなり

喜撰法師

9番 決はなの

花の色は うつりにけりな
いたづらに

小野小町

9番

わが身世にふる ながめせしまに

小野小町

10番 決これ

これやこの 行くも帰るも 別れては

蝉丸

10番

知るも知らぬも 逢坂の関

蝉丸

11番 決わたのはらや

わたの原 八十島かけて
漕ぎ出でぬと

参議篁

11番

人には告げよ あまの釣舟

参議篁

12番 決あまつ

天つ風 雲の通ひ路 吹きとぢよ

僧正遍昭

12番

をとめの姿 しばしとどめむ

僧正遍昭

13番 決つく

筑波嶺の 峰より落つる みなの川

陽成院

13番

恋ぞつもりて 淵となりぬる

陽成院

14番 決みち

陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに

河原左大臣

14番

乱れそめにし われならなくに

河原左大臣

15番 決きみがためは

君がため 春の野に出でて 若菜つむ

光孝天皇

15番

わが衣手に 雪は降りつつ

光孝天皇

16番 決たち

立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる

中納言行平

16番

まつとし聞かば 今帰り来む

中納言行平

17番 決ちは

ちはやぶる 神代もきかず 竜田川

在原業平朝臣

17番

からくれなゐに 水くくるとは

在原業平朝臣

18番 決す

住の江の 岸に寄る波 よるさへや

藤原敏行朝臣

18番

夢の通ひ路 人目よくらむ

藤原敏行朝臣

19番 決なにはが

難波潟 短き芦の ふしの間も

伊勢

19番

逢はでこの世を 過ぐしてよとや

伊勢

20番 決わび

わびぬれば 今はた同じ 難波なる

元良親王

20番

みをつくしても 逢はむとぞ思ふ

元良親王

21番 決いまこ

今来むと いひしばかりに 長月の

素性法師

21番

有明の月を 待ち出でつるかな

素性法師

22番 決ふ

吹くからに 秋の草木の しをるれば

文屋康秀

22番

むべ山風を 嵐といふらむ

文屋康秀

23番 決つき

月見れば 千々にものこそ 悲しけれ

大江千里

23番

わが身一つの 秋にはあらねど

大江千里

24番 決この

このたびは 幣も取りあへず 手向山

菅家

24番

紅葉の錦 神のまにまに

菅家

25番 決なにし

名にし負はば 逢坂山の さねかづら

三条右大臣

25番

人に知られで くるよしもがな

三条右大臣

26番 決をぐ

小倉山 峰の紅葉葉 心あらば

貞信公

26番

今ひとたびの みゆき待たなむ

貞信公

27番 決みかの

みかの原 わきて流るる いづみ川

中納言兼輔

27番

いつ見きとてか 恋しかるらむ

中納言兼輔

28番 決やまざ

山里は 冬ぞさびしさ まさりける

源宗于朝臣

28番

人目も草も かれぬと思へば

源宗于朝臣

29番 決こころあ

心あてに 折らばや折らむ 初霜の

凡河内躬恒

29番

置きまどはせる 白菊の花

凡河内躬恒

30番 決ありあ

有明の つれなく見えし 別れより

壬生忠岑

30番

暁ばかり 憂きものはなし

壬生忠岑

31番 決あさぼらけあ

朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに

坂上是則

31番

吉野の里に 降れる白雪

坂上是則

32番 決やまが

山川に 風のかけたる しがらみは

春道列樹

32番

流れもあへぬ 紅葉なりけり

春道列樹

33番 決ひさ

ひさかたの 光のどけき 春の日に

紀友則

33番

しづ心なく 花の散るらむ

紀友則

34番 決たれ

誰をかも 知る人にせむ 高砂の

藤原興風

34番

松も昔の 友ならなくに

藤原興風

35番 決ひとは

人はいさ 心も知らず ふるさとは

紀貫之

35番

花ぞ昔の 香ににほひける

紀貫之

36番 決なつ

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを

清原深養父

36番

雲のいづこに 月宿るらむ

清原深養父

37番 決しら

白露に 風の吹きしく 秋の野は

文屋朝康

37番

つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける

文屋朝康

38番 決わすら

忘らるる 身をば思はず 誓ひてし

右近

38番

人の命の 惜しくもあるかな

右近

39番 決あさぢ

浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど

参議等

39番

あまりてなどか 人の恋しき

参議等

40番 決しの

しのぶれど 色に出でにけり
わが恋は

平兼盛

40番

ものや思ふと 人の問ふまで

平兼盛

41番 決こひ

恋すてふ わが名はまだき
立ちにけり

壬生忠見

41番

人知れずこそ 思ひそめしか

壬生忠見

42番 決ちぎりき

契りきな かたみに袖を しぼりつつ

清原元輔

42番

末の松山 波越さじとは

清原元輔

43番 決あひ

逢ひ見ての のちの心に くらぶれば

権中納言敦忠

43番

昔はものを 思はざりけり

権中納言敦忠

44番 決あふ

逢ふことの 絶えてしなくは
なかなかに

中納言朝忠

44番

人をも身をも 恨みざらまし

中納言朝忠

45番 決あはれ

あはれとも いふべき人は 思ほえで

謙徳公

45番

身のいたづらに なりぬべきかな

謙徳公

46番 決ゆら

由良の門を 渡る舟人 かぢを絶え

曾禰好忠

46番

ゆくへも知らぬ 恋の道かな

曾禰好忠

47番 決やへ

八重むぐら しげれる宿の
さびしきに

恵慶法師

47番

人こそ見えね 秋は来にけり

恵慶法師

48番 決かぜを

風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ

源重之

48番

くだけてものを 思ふころかな

源重之

49番 決みかき

御垣守 衛士のたく火の 夜は燃え

大中臣能宣朝臣

49番

昼は消えつつ ものをこそ思へ

大中臣能宣朝臣

50番 決きみがためを

君がため 惜しからざりし 命さへ

藤原義孝

50番

長くもがなと 思ひけるかな

藤原義孝

51番 決かく

かくとだに えやはいぶきの
さしも草

藤原実方朝臣

51番

さしも知らじな 燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣

52番 決あけ

明けぬれば 暮るるものとは
知りながら

藤原道信朝臣

52番

なほ恨めしき 朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

53番 決なげき

嘆きつつ ひとり寝る夜の
明くる間は

右大将道綱母

53番

いかに久しき ものとかは知る

右大将道綱母

54番 決わすれ

忘れじの 行末までは かたければ

儀同三司母

54番

今日を限りの 命ともがな

儀同三司母

55番 決たき

滝の音は 絶えて久しく なりぬれど

大納言公任

55番

名こそ流れて なほ聞こえけれ

大納言公任

56番 決あらざ

あらざらむ この世のほかの
思ひ出に

和泉式部

56番

今ひとたびの 逢ふこともがな

和泉式部

57番 決め

めぐりあひて 見しやそれとも
分かぬ間に

紫式部

57番

雲隠れにし 夜半の月かな

紫式部

58番 決ありま

有馬山 猪名の笹原 風吹けば

大弐三位

58番

いでそよ人を 忘れやはする

大弐三位

59番 決やす

やすらはで 寝なましものを
さ夜ふけて

赤染衛門

59番

かたぶくまでの 月を見しかな

赤染衛門

60番 決おほえ

大江山 いく野の道の 遠ければ

小式部内侍

60番

まだふみもみず 天の橋立

小式部内侍

61番 決いに

いにしへの 奈良の都の 八重桜

伊勢大輔

61番

けふ九重に にほひぬるかな

伊勢大輔

62番 決よを

夜をこめて 鳥のそらねは
はかるとも

清少納言

62番

よに逢坂の 関はゆるさじ

清少納言

63番 決いまは

今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを

左京大夫道雅

63番

人づてならで 言ふよしもがな

左京大夫道雅

64番 決あさぼらけう

朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに

権中納言定頼

64番

あらはれわたる 瀬々の網代木

権中納言定頼

65番 決うら

恨みわび ほさぬ袖だに あるものを

相模

65番

恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ

相模

66番 決もろ

もろともに あはれと思へ 山桜

大僧正行尊

66番

花よりほかに 知る人もなし

大僧正行尊

67番 決はるの

春の夜の 夢ばかりなる 手枕に

周防内侍

67番

かひなく立たむ 名こそ惜しけれ

周防内侍

68番 決こころに

心にも あらでうき世に ながらへば

三条院

68番

恋しかるべき 夜半の月かな

三条院

69番 決あらし

嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は

能因法師

69番

竜田の川の 錦なりけり

能因法師

70番 決さ

さびしさに 宿を立ち出でて
ながむれば

良暹法師

70番

いづくも同じ 秋の夕暮れ

良暹法師

71番 決ゆふ

夕されば 門田の稲葉 おとづれて

大納言経信

71番

芦のまろやに 秋風ぞ吹く

大納言経信

72番 決おと

音にきく たかしの浜の あだ波は

祐子内親王家紀伊

72番

かけじや袖の ぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

73番 決たか

高砂の 尾の上の桜 咲きにけり

権中納言匡房

73番

外山の霞 立たずもあらなむ

権中納言匡房

74番 決うか

憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ

源俊頼朝臣

74番

はげしかれとは 祈らぬものを

源俊頼朝臣

75番 決ちぎりお

契りおきし させもが露を 命にて

藤原基俊

75番

あはれ今年の 秋もいぬめり

藤原基俊

76番 決わたのはらこ

わたの原 漕ぎ出でて見れば 久方の

法性寺入道前関白太政大臣

76番

雲居にまがふ 沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣

77番 決せ

瀬を早み 岩にせかるる 滝川の

崇徳院

77番

われても末に 逢はむとぞ思ふ

崇徳院

78番 決あはじ

淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に

源兼昌

78番

幾夜寝覚めぬ 須磨の関守

源兼昌

79番 決あきか

秋風に たなびく雲の 絶え間より

左京大夫顕輔

79番

もれ出づる月の 影のさやけさ

左京大夫顕輔

80番 決ながか

長からむ 心も知らず 黒髪の

待賢門院堀河

80番

乱れて今朝は ものをこそ思へ

待賢門院堀河

81番 決ほ

ほととぎす 鳴きつる方を
ながむれば

後徳大寺左大臣

81番

ただ有明の 月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

82番 決おも

思ひわび さても命は あるものを

道因法師

82番

憂きにたへぬは 涙なりけり

道因法師

83番 決よのなかよ

世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る

皇太后宮大夫俊成

83番

山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

84番 決ながら

ながらへば またこのごろや
しのばれむ

藤原清輔朝臣

84番

憂しと見し世ぞ 今は恋しき

藤原清輔朝臣

85番 決よも

夜もすがら もの思ふころは
明けやらで

俊恵法師

85番

閨のひまさへ つれなかりけり

俊恵法師

86番 決なげけ

嘆けとて 月やはものを 思はする

西行法師

86番

かこち顔なる わが涙かな

西行法師

87番 決む

村雨の 露もまだひぬ まきの葉に

寂蓮法師

87番

霧立ちのぼる 秋の夕暮れ

寂蓮法師

88番 決なにはえ

難波江の 芦のかりねの ひとよゆゑ

皇嘉門院別当

88番

みをつくしてや 恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

89番 決たま

玉の緒よ 絶えなば絶えね
ながらへば

式子内親王

89番

忍ぶることの 弱りもぞする

式子内親王

90番 決みせ

見せばやな 雄島のあまの 袖だにも

殷富門院大輔

90番

濡れにぞ濡れし 色は変わらず

殷富門院大輔

91番 決きり

きりぎりす 鳴くや霜夜の
さむしろに

後京極摂政前太政大臣

91番

衣かたしき ひとりかも寝む

後京極摂政前太政大臣

92番 決わがそ

わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の

二条院讃岐

92番

人こそ知らね 乾く間もなし

二条院讃岐

93番 決よのなかは

世の中は 常にもがもな 渚こぐ

鎌倉右大臣

93番

あまの小舟の 綱手かなしも

鎌倉右大臣

94番 決みよ

み吉野の 山の秋風 さ夜ふけて

参議雅経

94番

ふるさと寒く 衣打つなり

参議雅経

95番 決おほけ

おほけなく うき世の民に
おほふかな

前大僧正慈円

95番

わがたつそまに 墨染の袖

前大僧正慈円

96番 決はなさ

花さそふ 嵐の庭の 雪ならで

入道前太政大臣

96番

ふりゆくものは わが身なりけり

入道前太政大臣

97番 決こぬ

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに

権中納言定家

97番

焼くや藻塩の 身もこがれつつ

権中納言定家

98番 決かぜそ

風そよぐ ならの小川の 夕暮れは

従二位家隆

98番

みそぎぞ夏の しるしなりける

従二位家隆

99番 決ひとも

人もをし 人も恨めし あぢきなく

後鳥羽院

99番

世を思ふゆゑに もの思ふ身は

後鳥羽院

100番 決もも

百敷や 古き軒端の しのぶにも

順徳院

100番

なほあまりある 昔なりけり

順徳院